

(Missouri. Jap. christ.) 耶蘇教の我が國に入るは古し。後奈良天皇二十年葡萄牙船豊後の府に抵り、法教を説く大友義鎮其の教を喜び、款待日に渥し。西教の徒、日用便利の品を與へ、或は之れを製する法を教ふ。愚衆和附し信徒日に多し。筑紫は其の中心たり。弘治の頃、周防より安藝を經、三備を逾へ、近畿に侵淫し、遂に京師に入る。至る所寺宇を創建し、日夜講説す。三好長慶、松永久秀、浮田秀家の徒崇奉殊に甚し。天正二年信長バテレンを召して爲めに南蠻寺を築く。將軍義輝も之れを信ず。信長は佛教の驕横を惡み、繪旨を乞ふて其の宣教を許せり。信長又安土に城き、爲めに大成寺を建つ。是の時信徒頗る多し。耶蘇教は未來を希求する者なり。現世の富は以て未來の幸福を得る所以にあらずとなす。此の時天下大亂人其の生を苟もせず。此を以て遂に之れをして此く弘通せしめたり。佛教にては一向宗は尤も北國に行はる。日蓮宗も亦た頓に其の勢力を伸張したりしか之れに反して禪宗は稍々衰へたり。

佛教も耶蘇教も同く外國の教なり。然れども佛教は日本化し、殊に一

向宗日蓮宗の如きは日本にて發生せる者なり。故に人之れを怪まずと雖も耶蘇教は人心に新らたにして其の齎らす所の物異ならざるなく其の建つる所人目を聳動せざるなし。加之教士の宣教に熱心なる實に驚くべき者あり。此を以て少しの不敬も甚き暴慢の如くに感せられ、人に忌憚せらるゝの機會極めて多かりき。然れども天下大亂統一を失へるの時、此れより天下を一統せんとする信長は其の布教を許るせり。而して秀吉島津氏を伐ち還りし時、バテレンの軍を稿ふ禮辭不遜なるを以て怒り、教士を逐ひ、崇奉を禁ぜり。然れども通商を禁ぜざりき。

徳川氏に及むても其の始めは通商を喜び、深く耶蘇教を咎めず。秀忠の時海外諸國我と通商する者二十餘國、長谷川廣智、長崎より至りて家康に告て現今市易盛昌、外舶輻湊八十隻に至ると言へる時、家康之を

此の時に當たり、全國に亘り、耶蘇教徒の數は殆んど四十萬あり。是れ日本に於ける耶蘇教徒の羅馬法王に送れる書中の語にて明かなり。

Multis praeterea haec ecclesia est honorata  
martyribus, ob quorum merita in omnibus  
Iaponiae Imperii Regnis fides est propagata  
ita, ut numerus christianorum ad quatuor  
centum fore millia extendatur.

と。是れ秀吉の禁に逐ひたる後のことなり。



喜べりと云ふ。耶蘇教徒の異圖あるを聞くに及び、バテレンを海外に遂ひ、教禁を嚴にせり。然れども通商を禁せず、御朱印船を作り。卻て之を獎勵せり。家康の新スペインに與ふる書の一節に曰はく。

自今彼我締交、每歲通船、爲國爲民、何幸如之、吾國裁判以來、崇神爲道、君臣之誼、交際之約、誓神爲信、順則得福、逆則必殃、外教斷所不納矣、見領此義、則雖至何港、津必不相拒也。

布教に對しては益々戒嚴を加へ、家光に至り、遂に御朱印船をも已め、諸外國の來船を拒絶し、和蘭及支那の商船を許す。然れども教徒容易に鋤く可からず。遂に島原の亂あり。以後教禁益々嚴に、悉く神佛に歸依せしむ。而して鎖港主義を實行せり。是れ一は耶蘇教の亂に由ると雖も一は徳川氏の天下安固になり閉鎖的になりたるによるなり、此れより閉鎖せられたる社會の内に於いて佛教は其の光焰を逞ふし人心を吸收せり。佛教の迷信は靡然として人心を司配せり。將軍吉宗其の迷を破らんとし、益の十五日を以て故らに殺生を行はせられたりと云ふ。(出定笑語附録一上の二十九)

足利氏の末項より此く外國人の來りたる者多きが故に(一)物質上の影響を蒙り、小銃、築城術、洋菓子、寺院等に現はれ。大阪陣の時、關東勢巨礮を放ちて城樓を震動せしめ、川中島の役に甲越の武士多少の砲烟彈雨を交へ、眞田氏の徳川勢を苦めし如き、影響の及ぶ所なりと言はざる可からず。(二)精神上に於て、世界的なる耶蘇教を知り、異なる人物を見、異なる言語、風俗を目にするを得たり。此れ數の上より少々なりしと雖も、徳川氏の初世に向ふに従て愈々盛んになれり。吾が日本社會は當時に於ては大に世界的の風を帯びしなり。

今此に述べざる可からざる二結果あり。一を山田長政の暹羅に入るとなし、一を伊達政宗の使を羅馬法王に送りしとなす。政宗は東北の雄藩なり。慶長の頃、天下の覇權を掌握せんと欲し、力を耶蘇教に藉らんとせしが如し。此れ日本に於ける耶蘇教の羅馬法皇に贈れる書面中にある左の句に由りて推知するを得、曰はく

*Qui tres cum praefato Patre Sotelo, et eius socio Patre fratre Ignatio de*



Jesus [sic] de his omnibus longiore[m] facient relationem, et . . . . et a Deo tam opportunam occasionem nacti fuerint ad remedium nostrum et tantarum animarum procurandum. Ad quod non dubites (magne Patris) apertum fuisse magnum ostium, quando Deus predictum Regem de Voxu vocavit et illuminavit, quia in magnitudine et potentia omnium major existit, et ipsum quam primum Imperatorem futurum expectamus . . . .

殊に神の意志が伊達に在りとなせる所は尤も兩者の關係を推知するに足るべし。

徳川氏平定以來其の大志を伸るを得ず。因て海外に向て伸んとせるなり。嘗て詩あり曰はく。邪法迷人唱不終欲征蠻國未成功。圖南鵬翼何時奮久待扶搖萬里風と。以て其の志の在る所を知るべし。乃ち其の臣支倉六右工門を宣教師ソテロに従て羅馬法皇に遣はせり。

長政暹羅に行き國王を助けて亂を鎮め偉功を著はす。國王其の女を妻はす。日本の壯丁當時日本人村落をなす一を糾合して自ら將となる。是れ等は

皆天下一統主義の外國社會の影響によりて現はれたる者なり。此れより以後は社會全く權力的となり。閉鎖的となり。一も此れ等の人物を産せざるなり。

我が國閉鎖主義を實行したりと雖も耶蘇の萌芽全く削除する能はず。和蘭船の來る者海外の新智識を輸入せり。此れ實に日本社會に取りては必要なる原動力なりき。

## 第六節 文教主義の勃興

文學は朝廷にては和歌和文をととし平安朝を盛んなりとし其の以後絶ふるとなかりしが民間に在りては文字を識る者絶へて少く北條泰時京師に攻め上りし時宣旨來り五千餘人の從者中之れを讀み得る者僅かに一人なりしと云ふ。以て見るべきなり。戰國亂離の時に當たり學問は五山の僧侶の手に由りて傳へられたり。字を識らむとする者は僧侶に就いて之れを學べり。故に學徒を稱して寺子と云ふ。徳川家康天



下を統し、其の文學の上に及ぼしたる影響實に大なり。家康未だ天下を得ざるの時、己に經籍を印行し、以て文教を興せり。天下を得るに及び、益々學問を奨勵せり。學者は皆城下に在り、六十餘州に亘りて散居し、道を講し、文を作れり。文學の隆興は前古未だ有らざる所にして、徳川時代に於ける主要なる社會現象なり。而して其の種類を舉れば、儒學、國學、西洋學、小説類是れなり。

### 第一款 儒學

學者の需要甚だ少く、儒者は生活すると能はざるが故に、儒者は傍ら醫を業とせり。(伊藤仁齋)蓋し醫書は皆漢文にして、漢學者ならざれば讀むこと能はざればなり。然るに徳川氏初世の學者は皆雄大なる氣象を有せり。伊藤仁齋、物徂徠、貝原益軒の如き皆宋儒の説を疑ひ、之れを駁撃せり。彼れ等は直ちに孔孟の後に接せんとするの概あり。其の然かる所以の者は蓋だし、徳川氏の治世之れをして然からしめたるなり。

徳川氏の治世は、秀吉の征韓の後を受け、諸外國と交通の後を受け、雄大な封建制度の利益を受けたるが故に、國民の意識も大に發達し、此の雄大なるを致せるなり。徳川氏の初め、惺窩最も名あり。家康召して學を問ふ。

惺窩の學問は重もに程朱學なれども、亦た陸象山をも研究し、又初め僧侶に付て禪をも學びたり。其の博學なるとは我が國罕れに見る所なり。林羅山は其の門人にして、斷然朱子學を主張せり。彼れは神社考を著はし、佛教は夷狄の法、兩部神道習合神道の如き、皆な日本の俗を變じて夷狄の俗たらしめんとする者なるを言へり。羅山幕府に仕へ、子孫世々學を以て仕ふ。大學頭是なり。子春齋、孫鳳岡皆朱子學たり。學問勃興の氣運も頓に開け、有名なる學者踵を接して起れり。學問の諸派は此の時に發生せるなり。

(一) 朱子學は幕府の正學として天下を風靡し、土佐に谷時中あり。野中兼山、小倉三省、山崎闇齋等皆其の門に出づ。又木下順庵あり。新井白



石室鳩巢、雨森東、祇園南海は其の門に出づ。

(二) 古學を唱ふる者には山鹿素行あり、伊藤仁齋あり、次いで物徂徠一方に崛起し、仁齋の子東涯最も名あり。

(三) 陽明學にては中江藤樹あり。

中江藤樹。藤樹は近江の人なり。德行あり。初めに朱子學を研究し三十三にして王龍溪の語録を得て之れを読み、稍陽明學の何たるを知る。寶永十八年、拘泥の非を知り。諸生に謂て曰はく、余嘗て朱學を信じ、汝輩に命ずるに専ら小學を以て準則となせしが、今始めて其の拘泥の甚たしきを知れり。蓋し格法を守ると名利を求むるとは、日を同ふして論ずべからずと雖も、其の眞性活潑の體を害するに至りては、則ち一なり。汝輩聖賢の書を讀まば宜く其の意を師とすべし。其の跡に泥む勿れと。茲に於いて陽明の活潑潑地の學風を學ぶに至れり。三十七歳の時、陽明全書を得て之れを読み、致知の知は良知なるを知り、豁然として貫通せるの感ありき。此くして陽明學の精髓を得たり。

此くして藤樹の學説は朱子と陽明とを兼ねたり。學風にては陽明を奉じ、致良知を根本主義とせり。然れども、哲學思想に至りては、張橫渠、朱子の流なり。藤樹は近江聖人を以て目せられ、頗る徳望あり。藤樹の門に熊澤蕃山あり。岡山池田侯に仕へ、頗る治蹟あり。

山崎闇齋。闇齋は朱子學を脩めたり。其の門に三宅尙齋、淺見綱齋、佐藤直方等あり。闇齋は程朱の學を尊崇し、性に關する説、冲漠無朕説等を單行本として發行し、大に程朱學のために悉せり。太極説は其の門に於いて盛に講説せられたり。闇齋晩年に神道を聞き、一種の神道を唱へ出せり。此れ上古の神を以て人にあらず、眞の神となし、人は此の神と同じものとなし、天人唯一とせり。而して人の神と一なるは唯敬に由るととせり。此れ即ち朱子の敬を合せたる者なり。之れを垂加流の神道と云ふ。

我が國勢の旺盛にして人氣の隆大なる數百年來、信奉せられたる朱學を疑ふの學者を生じたり。貝原益軒是れなり。益軒は一に損軒と號す。



當時博學多識の人なり。始め朱子學を尊奉せしが終に疑ひを挟み大疑録を著はせり。仁齋と同一理は氣の理なりとし性は氣質の性なりとす。故に水火なる氣が亡ぶれば熱冷なる性も亡ぶる如く人も死すれば則ち其の性は亡するものなり。然るに宋儒理氣と云ひ本然の性氣質の性と云ふは誤りならずや。孔門の教は孝弟忠信を第一とすれども宋儒は太極理氣を第一義とす。其の間大に異なる所あるが如し。又聖人は無を説かざれども宋儒は即ち却て之れを説く。益軒の一元氣の説は明の羅整菴に出でたり。益軒は既に宋儒に疑を入れたりしかば陽明を斥くると最も甚だしく其害六朝の清談より大なりとせり。大疑録

伊藤仁齋。仁齋も亦た朱子學を奉ぜざる者なり。仁齋は京都堀河の人一代の儒宗たり。溫良の君子として深く學者の敬服する所となる。孔孟を以て端的となし。宋儒を以て禪儒となして取らざるなり。

哲學。仁齋は宋儒の二元論を排し氣の一元論をなせり。明の吳廷翰も嘗て此の説あり。仁齋の氣は宋儒の氣と異なり。天と地との間に充

滿せる氣なり。仁齋の言に曰はく。

何を以て天地の間は一元氣のみなりと謂ふや。此れ空言にて曉すべからず。請ふ譬喩を以て之を明かさむ。今若し版六片を以て相ひ合せて匣となし密に蓋を以て其の上に加ふる時は自ら氣ありて其の内に盈つ。氣ありて其の内に盈る時は白醜を生ず。既に白醜を生ずる時は又自ら蛙蟬を生ず。此れ自然の理なり。蓋し天地は一大匣なり。陰陽は匣中の氣なり。萬物は白醜蛙蟬なり。是の氣や從て生ずる所なく亦從て來る所なし。匣ある時は氣あり。匣なき時は氣なし。故に天地の間は只是れ此の一元氣のみなるを知るなり。見るべし。理ありて後ち斯氣を生ずるにあらざるを。所謂理とは反て是れ氣中の條理なるのみ。語孟字義卷上二枚

而して童子問に於ては天の活物たる所以は其の一元の氣あるがためにして、恰も人に元陽あるがために飲食言語視聽動作息むとなきが如くなりとなせり。是れに由りて之れを觀れば天地に存在し其の中に氣あ



りて、此の氣が一切萬物を生成するなり。是れに因りて天地は一大活物の仁語たるなり。此の天地と氣とは無始無終にして萬古變るとなし。天地は此の一元氣を有し生々已むとなし。生々已まざるは天地の道なり。仁齋曰はく。

天地の道は生ありて死なく、聚ありて散なし、死は即ち生の終り、散は即ち聚の盡るなり。天地の道は生に一なる故なり。

と。彼れは生と死、聚と散、兩々相對する者にあらずとなせり。而して童子問に於いては善とは生の類となし、善は生ずるものにして隨て宇宙間には性質上善のみ之れありて、惡は善の變じたる者となせり。然れども此の説誤るなり。要するに仁齋の宇宙論は天地の間に一元氣ありて、活動しつゝありて或は陰となり。或は陽となり、以て一切現象を現するとなすのみ。之れを以て哲學的の一元論となすは穩かならざるなり。

仁齋は道を以て即ち仁義なりとし、宋儒以來天地自然の理となし、性となすに反せり。彼れは人道に仁義あるは天道に陰陽あるが如しとせり。

童子問仁齋に據れば天道には陰陽ある如く、人道に仁義あるなり。然るに仁義禮智は皆其の根を心に有する者にして磨滅すべからず童子問故に仁齋は性は善なりとなせり。論參性惡而して仁齋は極めて誠の一字の大切なるを主張せり。

仁齋は本然と氣質の別を立てず。宋儒の説に反し、孟子の性善は氣質に就いて云ふものとせり。換言すれば人間の氣質性即ちが善なりとなせり。故に仁齋の説は常識にて性善と言へるに同じ。要するに仁齋の宋儒に異なる所は、哲學的ならずして常識的なるに在り。彼れの典據とする所は孔孟なり。孔子は純ら常識を以て其の教を建て、孟子は仁義禮智を以て心に根すとなす點に於いては稍々究理的なり。然れども本然氣質の別を立てしにあらず。此の故に仁齋の説は常識に返へりしなりと云ふべし。此れ復古學の復古學たる所以なり。唯天地の間一元氣のみなどと喝破する所は未だ宋儒の影響を免れざる所なり。

仁齋は大學は孔子の遺書にあらずとなし、中庸を以て一人の手に出る



にあらずとなす。皆卓見なり。其の門人頗る多し。其の子東涯最も名あり。

東涯。東涯の博學は仁齋の右に出づ。然れども其の父仁齋の説を紹述するのみにして一の新機軸なし。門人又た甚だ多し。

仁齋の他の門人にして有名なるを中江浪山一七二五一七二五となし。並河天民一七七八一七七八となす。天民の説は往々にして仁齋に異なる所あり。仁齋死後、仁齋學派は分れて天民派東涯派となれり。

物徂徠。徂徠は仁齋に反對して一派を立てたる者。其の見識は全く仁齋に出てたれども仁齋が孟子を取れるに反して彼れは孟子をも駁撃し、時に孔子をも評隲せり。彼れが仁齋を攻撃せるは彼れに書簡を送りしも仁齋返書なかりしに因るなり。徂徠始めは諸方に寓せしが後江戸に住せり。徂徠の特徴は左の如し。

(二)道の解釋。徂徠は道を以て禮樂刑政となし、隨て道は先王の制作せる所、天地自然にあらずとせり。後人の之を攻撃する者多けれども皆誤

りなり。

(二)徳の解釋。道を學びて已に得る所の者之れを徳と云ふ。虞書に所謂九徳周官の六徳、及び傳に所謂仁智孝弟忠信恭儉讓不欲剛勇正直の類是れなり。

(三)性。而して人々如何なる徳を得るか、之れ人の性に由りて異なれり。性は人々同からず。隨て其の得る所も亦た同からざるなり。故に性を以て善となし、惡となすべからずとなせり。

子思孟子蓋亦有屈於老莊之言。故性善以抗之。爾荀子則慮夫性善之説必至廢禮樂。故言性惡以反之。爾皆救時之論也。豈理哉。

と。以て見るべきなり。要するに性の近き所を以て其徳をなすべしとなすなり。故に性は仁齋の説と同じ、氣質なり。

(四)古文辭。徂徠は漢以上の文を模倣し、所謂古文辭を作せり。古文の佳句繡句を蒐めて以て一文をなすなり。

(五)徂徠豪放にして眼中人なし。自ら日本第一の學者となせり。最も



伊藤仁齋を駁撃せり。要するに徂徠の學説は伊藤仁齋の如く哲學的ならず、専ら六經と論語とに依り、孟子以下を取らざるなり。故に仁齋が何分か宋儒の影響を蒙むるに反し、徂徠は殆んど其の影響を感ぜざるなり。

徂徠の門下甚だ多し。服部元喬、山縣周南、鷹見爽鳩、皆文學を以て名あり。太宰春臺は獨り文學の外に思想の稍々見るべきあり。其著辨道書聖學問答等は國字文なれども其説を見るべきなり。徂徠は道を以て客觀的となし、之に率由するを以て主となせしより、春臺は心の善惡はさて置き、外面にさへ禮義を行へば則ち君子なりとなすに至れり。聖學問答

徂徠の學派を護

神巫行

太宰純

園學派と云ふ。徂徠詩文に巧みなり。故に其の徒皆詩文に長ず。詩に長篇

宕丘之山鬱崔嵬。朝雲暮雨去復來。宕丘巫女何姣麗。弱質阿娜倚高臺。長者二十少二八。恰似芙蓉並帶開。金釵玉簪羅衣裳。環姿瑋態極容光。耀若白日照屋宇。皎若明月臨池塘。聯娟雙眉不待畫。花顏豈假紅粉粧。

多し。此の時新井白石、室鳩巢亦た名あり。白石は行政官として大岡越前守と並らび江戸の奉行たり。又西洋人に就きて西洋の情狀を知り采覽異言を著はす。藩翰譜折たく柴の記古史通等あり。白石史眼殊に高し。鳩巢も亦一代の儒宗なり。當時は雄偉

疎已含無限意。一顧斷盡萬人腸。儻遇吳王便傾國。即入漢宮定專房。清歌妙舞真絕倫。起雲行雨信有神。城中紛若禱祠者。投與金幣如埃塵。那知蛾眉能伐性。况復尤物尤傷入。須臾神升歌舞休。美人歸去不回頭。陽臺夢覺無消息。依舊雲雨繞宕丘。

諸葛武侯畫像歌

新井璣

太華山裂失赤符。神龍潜伏海將枯。誰知時務在俊傑。此間足數鳳之雛。關張不說魚水合。君臣奇遇絕代無。立談既定三分業。願託不負六尺孤。王佐從來見伊呂。兵謀何必事孫吳。葛巾羽扇清渭曲。中原赤子後來蘇。萬古精靈長不死。豈唯當年魏人趨。桓溫素有雄心在。只識常山蛇勢圖。

月出歌送櫻生還郡山

三蓋山頭月出光。天涯孤客空斷腸。君不見日本晁卿



なる學者の輩出せる時代にして詩に於いても長篇多し。頼山陽嘗て當時人才の手腕の大なるを稱す。今其一二例を下に列す。

遊異境。金門直入秘書省。萬古風人開天間。提李挈王交馳騁。兼傳和歌一何悲。當時東望明月影。明月且出扶桑條。十洲三島拂紫霄。此道此人人所羨。千載且暮自寥寥。南都之南富雄水。君歸試求何處是。三蓋山頭月出光。皓兮看時憶我否。

寄題豐王舊宅

物徂徠

絶海樓船震大明。寧知此地長柴荆。千山風雨時時惡。只作當年叱咤聲。

### 第二款 俳諧戯曲

俳諧を以て萬世を睥睨せる芭蕉其の人も亦此時代に出てた。其の師は即ち北村季吟なり。芭蕉學識あり。故を以て能く俳諧の風を一變するを得たりと云ふ。芭蕉の門に其角、嵐雪、去來、許六等あり。

戯曲には有名なる近松門左衛門あり。元祿より享保に至る頃、其の名

を轟かせり。小説には元祿に井原西鶴あり。皆巨擘なり。

### 第三款 學問織細となりしと

徳川氏の初世は創業僅かに成り。人心其の大を感じ功業の偉なるを稱するの時なるが故に學者の氣象も亦た頗る偉大なりき。霸業漸く確定し天下擾亂の憂なきに及んで規模狭小となり。學者の事業も漸く織巧となれり。儒者は單に師説を傳承するか。或は一二派を調和するに止まれり。當時朱子學は幕府の林家及山崎派の盡力に由りて大に天下に蔓延し至る所に朱註を用ひたり。然るに陽明學、徂徠學、異説紛々として人を煽導するの恐れあるを以て寛政年間白川樂翁老中となりし時、斷然異學を禁制せり。當時朱子學を以て有名なるは柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲等なり。尾藤二洲は正學指掌を著はし、朱子學を尊崇し、仁齋を駁して一元氣のみとなすを非し、則りは即ち理なりとせり。又た徂徠學を排し、理民のとのみを言ひて身心を言はざるを短とし。次いで陸王の説



を排せり。  
太田錦城は疑問録を著はし、程朱の説の佛教に出るを字句の上より明かにせり。

此の頃に次いで佐藤一齋あり。大鹽平八郎あり。一齋は仕官せしため陽には朱子を取りしが陰には陽明を尊べり。著はす所言志録言志寤録等あり。大鹽は公然として陽明を主張し、天保七八年の饑饉に際し大に窮民を救はんとし先づ檄を飛ばす。中に天照皇太神の時代に復したきとの句あり。此れ實に王政復古の精神なりとす。此の後文章に長ぜる者彬々として出づ。元録の頃は漢學者が漢字交り文にて書を著はすと多かりしが此の後殆んど是れなく。漢字混り文は小説家の手に歸せり。小説家の有名なる者を瀧澤馬琴となす。著はす所八犬傳、田舎源氏、弓張月美少年録あり。而して詩文は學者の能事となれり。佐藤一齋、賴山陽、藤森弘菴、長野豊山、坂井虎山、齋藤拙堂、齋藤竹堂、安積長齋、松本奎堂、寺門靜軒、森田節齋、野田笛浦、松林飯山、文章を善くし。或は兼ねて詩を善くす。詩

人としては梁川星巖名あり。其の門に森春濤、大沼枕山、岡本黄石、小野湖山あり。藤井竹外七言絶句を善くす。九州に在りては廣瀬淡窓最も詩に巧みなり。天保を盛んなりとして皆な徳川氏太平の運に乗じて醸出せり。其の状恰も春陽に乗じて人の野外に出るが如し。其の詩文共に巧みなり。然れども元祿享保に比して規模小なり。竹外の二十八字の詩の如き、摸範的の産物なりとす。當時古詩は稀れに、大抵律絶なり。山陽は巨擘と稱せらるゝ、丈長篇も多けれども一般に律絶を多しとなす。徳川氏の末世、文章にて最も有名なるを安井息軒、鹽谷宕陰、林鶴梁の三人とす。

#### 第四款 國學

歌道は古より行はれしが、之れがために國學を修むる者あり。細川幽齋あり。木下長嘯子あり。此れ等は慶長の際にして皆自然的趣味を以て國學を研究し、國文を綴りしものなり。徳川氏の世となるに及び下河



邊長流僧の契仲あり。之れと同時に幕府に北村季吟あり。季吟は歌よりは寧ろ古書其物の研究に力を注げり。彼れは枕草紙、源氏物語其他此種の書物に注解を施せり。其後仁齋より少く後れて荷田春滿の出るあり。春滿は國史、律令、古文、古歌に精通せり。其の門人に加茂眞淵あり。著はす所冠辭考、萬葉考、祝詞考、國意考、文意考、源氏物語新釋、伊勢物語古意、古今集打聽、岡部日記等あり。以て其の國學の上に大なる効績あるを知らべきなり。眞淵の門に本居宣長あり。宣長著はす所尤も多く、古事記傳は古事記の詳解にして古事記を讀む者讀まざるべからざる所。歷朝詔詞解は六十二の詔勅を解釋せる者。其の外に漢字三音考、字音假字づかひ、地名字音假字づかひ、詞の玉の緒、直日靈、玉飾、箭玉、餅百首、紐鏡等あり。

荷田春滿以下は皆漢學者の影響を受けて起れる者なり。漢學者は物徂徠の如く自ら東夷と稱する者あるに至る。國學者は國典を讀めるが故に我が建國の由來する所を知り。國體を明かにし、國體を尊ぶの觀念

は、一層其の強度を増したり。故に漢學者の愈々緻巧となれるに反し、國學者は益々精神的となり。慷慨悲憤となれり。宣長の君子を以て、藤原貞幹が神武天皇は吳太伯の裔なりと謂ひし時、<sup>△</sup>倭<sup>△</sup>狂人なる書を著して之を駁せり。彼れ等は國史を脩めて天神正統の天子の上古に於て赫々たる權力を有し給ひ、一旦武人の幕府を開きてより、神靈の宿れる三種の神器を擁しながら陰居同様の有様<sup>大鹽平八郎の語</sup>となりしを知り、無念遣る方なきなり。宣長の門人に平田篤胤あり。出定笑語、出定笑語附録を著はし、佛教を罵倒し、痛快至らざる所なし。俗神道大意は即ち神道なる者は別に一派の道あるにあらず、世の所謂兩部神道、惟一神道、垂加神道等は後人の濫りに造りし者にして信ずべからざるものとなし。日本は萬國の祖にして皇室は萬國の主隨て神道は萬國の道なるを述べたり。篤胤は徹頭徹尾神道に特別の教あるにあらざるを主張し、唯日本固有の國體を發揮せんとに勉めたり。此の頃迄の有名なる學者を擧ぐれば、塙檢校保己一あり。群書類從正續二千餘卷を編輯せり。又伴蒿溪、平春海あり。



萬葉集畧解を著はしたる橘千蔭あり。  
 此れ等國學の隆盛は徳川氏あるを知りて朝廷あるを知らざる時代に  
 取りては大なる刺戟にして勤王論は之がために大に挑發せられたり。

### 第五款 西洋學

和蘭人は長崎に來りて互市し、醫藥天文の書を傳ふ。將軍吉宗洋書の  
 禁を弛るめ、耶蘇教にあらざるよりは皆購賣を許るせり。而して邦人  
 の耳目を驚かし、幕府に異まれたる者は、渡邊華山の鶯舌小記、慎論、高野長  
 英の夢物語なり。(文明東漸 史參看) 夢物語は問答體にして、英國の事情を書きたる  
 ものなり。此の書未だ人に示めざりしが、傳播して之を續成する者あ  
 るに至れり。天保九年十月英將モリソン來る。幕府誤りて船名となし、  
 之を砲撃せんとす。時に都下に尙齒會なる者あり。西洋學に通ずる者  
 の會なり。華山長英亦與る。席上幕府の此議を聞き、皆以爲らく、英國は  
 大國なり。我が國以て海賊の類となし、之れを砲撃し、遂に其の反噬に逢

ふ時は如何んともする能はずと。以上の書は之れを警告し、外國の事情を  
 詳かにせんとしたる者なり。相ひ共に言ひけらく、之れ等の書は、我輩に  
 は通常なれども、世人には奇怪なり。必ず幕府の嫌疑を蒙らむと。此時  
 儒宋林大學頭銜の第三子鳥井耀藏幕府の監察たり。事に由りて洋學者  
 江川太郎左衛門と隙あり。終に洋學者を讒す。華山長英捕はる。一旦  
 宥るされ。後天保十六年華山自殺し年四十九 嘉永三年長英幕府の捕吏と戰  
 て自殺す。年七十四

### 第六款 結 論

儒學は戰亂の世の中には僧侶の間に潜伏し居りしが、一統の氣運開く  
 るに及び、煥發して芳を一時に競ひ、從來歌道たりし國學も古書の蒐集と  
 共に漢學と抗衡せんとし、戯曲小説俳諧亦從て見はる。漢學者は支那の  
 學術を脩めて日本に昏らく、自ら輕蔑せるに反働して、國學者は國體を明  
 かにし、皇室を尊び、勤王の思想を勃起せしめたり。而して洋學者は西洋



の事情を明かにし、我が國の彼れに如かざるを知ら、開港の必要を唱へたり。而して西洋の事情を詳かにせざる漢學者は、洋學者を攻撃せり。這般の思想は中々活動的なりき。幕府の末に及びて學問の普及し、學者の輩出する其の數を知らざるなり。

### 第七節 勤王主義の勃興

文教主義の淵源する所遠し。徳川氏に及びて諸種の學派併らび起り、國體の精華を發揮し、天皇の尊ぶべきを知らしめたり。當時の幕府が政治の中心たるが故に人民は幕府を知るのみ。叙位仕官は朝廷の權なるが故に位官ある者は少く皇室あるを知れり。(福地氏論)而して大に朝廷の觀念を興へし者は實に學問あるのみ。乃ち書を讀める者の中には慷慨悲憤して已まざる者あり。況んや江戸城の壯大、徳川家の奢靡と皇家の衰退と著るしき對比をなすに於てをや。文教主義は徳川氏が社會統治に必要なりとして獎勵したる所なりき。然るに勤王主義は卻て其結果

として膨發し來れり。

勤王主義は承久建武の際にて明かなる如く、武家に對する大打撃なり。徳川氏始めより朝廷を恐れ、之に備ふる所以の者至れり。然るに如何せむ。内部より既に斯の主義の起れるを。勤王主義にして全社會を支配すれば、則ち幕府は自滅せざるを得ず。建武の時、何が故に勤王主義は遂に成らざりしか。他なし。土地絶對主義の盛んなりし時なるを以てなり。徳川時代は之れと異り、社會平安にして文教に由り、倫理の觀念を養成し得たり。而して勤王主義は理論の上より、又感情の上より、彼れ等の精神に陶冶せられたり。是れ勤王主義の徳川時代に起りて、能く其の功をなしたる所以なり。

### 第八節 海防主義

文教主義の結果として、西洋の事情に通ぜざる者は、其の悔る可からざるを知り。海防の必要を唱へり。幕府のなす所を見て、毎に隔靴搔痒の感



をなせり。海防主義が持論として維持せらるゝは、文教の結果に由らず  
むばあらず。隨て徳川時代の産物たるを失はざるなり。

攘夷主義。外船の來港を謝絶してより外船時に邊海に出沒する者あり。我が國民は既に永く平和なる生活を送り、國體の由來を明かにせるが故に、直ちに彼れ等を以て夷狄となし、禽獸となし、攘夷主義を懐くものあり。此くて、攘夷主義も亦た文教主義の結果なりとなさざる可からず。

### 第九節 諸主義沸騰の狀

今、此れ等主義發生の狀態を左に録す。

後桃園天皇の時即ち將軍家重の頃、竹内式部は山崎派の學を脩め、京師に入りて慨論して曰はく。

當時將軍あるを知りて天子あるを知らざる者多し。是れ君臣の不學に由る。若し君臣學徳あらば自ら公家一統の世とならむ。

と。其の後甲府の與力、山縣大貳、藤井右門等皆皇室の式微を嘆せり。

幕府の忌諱に觸れて捕へらる。此れより勤王論漸く起れり。

林子平の海防論。子平は仙臺の人にして、平素地理を好み。海内の形勢山川廣狹一々暗記せざるはなし。此れより先き西洋諸國屢々邊境を窺ふ。海内の人未だ其の何物たるを知らず。子平獨り慷慨悲憤、天下に先ちて憂へ、専ら邊防の必要を唱ふ。長崎に至り外人に就いて外國の事情を詳かにし、益々邊防の必要を感じ、海國兵談十六卷、三國通覽を著す。海國兵談の中に、日本橋の水、歐羅巴洲に至るを論ぜり。其の海防の觀念以て推す可し。三國通覽は朝鮮、琉球、蝦夷三國の形勢を述べたる者なり。二書の刻既に成る。人皆な以て無根の事となし、幕府も命じて梓を毀たしめ、而して身は仙臺に護送せられ、遂に獄中に死す。

高山彦九郎の勤王海防論。彦九郎は上野國新田郡の人なり。十三の時太平記を讀み、中興の業成らざるを憾み、廣く天下の士と交はり。皇室のために悉さんとを期す。時に魯西亞切りに蝦夷を窺ふ。彦九郎、蝦夷に入り、辛酸を嘗めて、其の地勢を察し、海防の必要を唱ふ。其の京師に入



るや。三條橋上に至りて眺み。叩頭して曰はく草莽の臣高山彦九郎と。路人以て狂となせども顧みず。嘗て足利尊氏の墓に至り、其の罪を鳴らす。國史を讀むて北條足利に至れば悲憤慷慨、涙編を濕す。後關西に至りて事の成らざるを見て快々として樂まず。遂に自殺す。

蒲生君平の勤王海防論。蒲生氏は藤原秀郷の裔なり。世々名族たり。母の其の家系を語るを聞き、慨然として家名を起すの氣あり。君平常に皇室の陵夷するを嘆じ、西洋諸國の邊海を窺察するを憂ふ。君平又山陵の荒廢を嘆じ、或は古記に據り、或は自ら其の地を探檢し、非常なる苦辛の後、山陵志を著はし、當路者に獻ず。魯西亞人の蝦夷を攻掠すると聞き、憤懣の至りに堪へず。不恤緯五編を著はす。別に今書七編あり。革弊、賦役、金穀、姓族、名勢、祀政、政教是れなり。要は國躰を發揮し、皇室を隆昌ならしめんとするにあり。頼朝を以て賊となし、佛教耶蘇教を以て害ある者となせり。會澤安の新論と好一對の書なり。文化十年疾を以て江戸に没す。年四十六。

子平君平彦九郎を寛政の三奇人となす。君平子平を訪へる時子平野人となして見ず。君平も罵詈して去る。子平彦九郎を稱して善く泣くのみとなし。又見ざるなり。此れ等三子は日本社會の新氣運を促がすに偉大なる功ありし者なり。

頼山陽の勤王論。頼山陽は近世の名儒にして安藝の人なり。幼より史書を好み。武家の來由を明にし、皇室の式微を嘆じて時人をして武門の權を得るは頼朝以來の事なるを知らしめ、皇室あることを知らしめんとし、日本外史を著はす。又日本政記を著はし、天皇世々の治蹟を明かにす。外史と經緯を相ひ爲す。又海防の必要を感じ、新策政本を著はす。當時關東にては佐藤一齋を推し、關西にては頼山陽を推す。一齋は經學に長じ、山陽は詩文に長ず。

水戸齊昭の勤王海防論。水戸の齊昭卿も亦幕府に建議して山陵を脩むるとを云ひ、又巨礮を鑄て以て外交に備へり。

藤田東湖の勤王攘夷論。水戸の人にして父一正、夙に外夷の邊境を伺



ふを惡めり。東湖父の祿を襲ぐに及び一藩事多し。然れども皇室を尊び大義を明かにするの念は終始絶へず。一時の豪傑皆來りて交りを訂せざるなし。東湖著はす所弘道館記述義正氣歌尤も其精神を見るに足る。回天詩史は東湖一人の思想として見るべきものなり。正氣歌に句あり、曰はく、

孰能持持之。卓立東海濱。忠誠尊皇室。孝敬事天神。脩文兼奮武。誓要清胡塵。

と東湖の當時に處する、又實に尊王攘夷主義なり。或は曰はく、東湖海外の事情を詳かにし、到底武を以て抗すべからざるを知る。其の攘夷と云ふ者は士氣を激厲するためなりと。其後幽囚せられ安政二年地震にて死す。

佐久間象山の海防論。象山は信州松代の人にして廣く海外の書を讀み、其事情を明かにし、盛んに堅艦を製し、海防を嚴にすべきを云ふ。當時に於いて最も識見高き者なり。品海の砲臺を見て晒て人に謂て曰はく

廟堂此を以て外寇を防禁するの術を得たりとなすかと。

會澤安の勤王論。水戸の碩儒にして新論の著者なり。新論は上下二卷より成る。(一)國躰(二)形勢(三)虜情(四)守禦(五)長計の五篇に分かる。虜情形勢守禦の三篇は當時の政策を論ぜる者、國躰と長計とは日本社會組織の最も安固なる形式を述べたる者なり。彼れは祭政一致を以て吾國躰の主義となし、祭りの重大なるを主張し、以爲らく人民の尊敬する所を祭りて人民を係屬せざる可からず。古より天社國社を置くも畢竟此義に外ならず。天社國社は各地方人民の尊崇敬祀する所、此故に此れ等の神社には皆大坂を頌ち以て民心の尊崇する所を一つにすべしと。彼れは天祖を崇拜すべきを言へり。天祖を崇拜すれば則ち天皇も亦隨て之れを尊崇するに至るべきを以てなり。其の言に曰はく、

有斯祭、則有斯義。行之朝廷、達之四方。報本反始之義、與其所以爲民祈禱之意、舉而皆與天下同之。上任其事、而民聽於上、顯々然唯廟堂是仰、而神奸不得行、民志之所以統一也。



と。此くして此の書は一たび絶板せられたり。  
 吉田松陰の尊攘主義。吉田寅次郎は長州藩士なり。勤王の志篤く、嘗て尊攘堂を作らむとす。安政六年捕へられ獄中に在り、入江子遠に尊攘堂に付き依頼する書の一節に曰はく。

尊皇攘夷の四字を眼目として何人の書にても何人の學にても其所長を取る様にすべし。本居學と水戸學とは頗る不同あれども尊攘の二字はいづれも同じ。平田は又本居とも違ひ癖なる所も多けれども出定笑語、玉櫛等は好書なり。關東の學者道春以來新井室徂徠、春臺等皆幕府に倣しつれども、其内に一二箇所の取るべき所はあり。伊藤仁齋などは尊王の功もなければ、人に益ある學問にて害なし。林子平も尊王の功なし、攘夷の功あり。兼て御話中候、高山、蒲生、對馬、の雨森、伯陽、魚屋の八兵衛の類は實に大功の人なり。各神牌を設くべし。右諸家の書を聚め、長を採取。人物格別功あるは學習院中へ神牌を設くる等の評議は中々大議に付天下の人物を聚めねば不出

來、人物聚らずとも諸國へ京師より人を遣し、豪傑の議論を聞聚め、京師にて大成すべし。

と。以て其志を見るべきなり。松陰二十九歳、安政の獄に死せりと雖も、有爲なる門人極めて多く、以て維新の原動力をなせり。

又梁川星巖、大橋順藏等あり。大橋は關邪小言を著ほし、西人を攻撃せり。

### 第十節 幕府諸主義のために壓せらる

諸國議論紛々たり。其の由來する所を窮むるに他なし。文教主義の結果として、勤王主義出で、海防主義攘夷主義之れに伴ひたるなり。幕府の權力主義は吉宗の盛治を経て家重に至りて其の極に達し、田沼意次を用ふるに及び、奸曲多く、政大に亂る。一方に於ては、太平日久く、天下又權力の必要を知らず。文恬武熙、上下逸樂を事とし。權力主義も境遇上弛廢せり。勤王主義は幕府に反對なる所なるが、海防主義攘夷主義も亦幕



府の不可能なる所なりき。是に於て幕府の取れる權力主義及び文教主義は兩方面より幕府の社會を壞廢する原動力となりき。勤王攘夷海防等の主義が愈々勢力を得幕府が之れを實行する能はざるを見るや幕府の人望は愈々墜ちたり。此に於いて我が國は朝廷を戴くにあらざれば統治し難き者となすの勢判然たり。カクリヒス氏論況んや幕府は世論に正反對なる主義を取りて開港を主張せるに於いてをや。而して此の運命をして一層早からしめし者はペルリの來朝なり。嘉永六年亞米利加の使節ペルリ浦賀に來り通商を求む。幕府明年を以て答ふるを約す。此年將軍家慶薨じ子家定職を襲ぐ。翌年ペルリ再び戰艦を率ひて浦賀に來り答書を求む。幕府下田箱館二港に於いて薪水食料等を給するを許す。魯英佛三使繼ぎ至る。並に約を結ぶ前の如し。安政三年合衆國の使節ハルリス下田に來り翌年江戸城に來りて將軍に謁し往復辨論二年を経す。安政五年幕府大老井伊直弼の説を用ひ長崎箱館神奈川兵庫新潟五港を開き自由貿易を許し米魯英佛蘭の五國と假條約を結び剩へ

准許を待たざりき。況んや朝廷は攘夷主義なるをや。是に於いて勤王主義を取り攘夷主義を取る者は春草の如くに勃起し其の非を唱へたり。伊井直弼議者を捕へて之を死流禁錮せり。頼三樹三郎梅田雲濱橋本左内其他此の時に殺さるゝ者五十人。

然れども攘夷主義は卻て勃興し。萬延元年水戸藩士十七人直弼を路に殺す。老中安藤信正も亦狙撃せらる。兇手の斬奸趣意書に云はく近世野史二

御老中對馬守殿は井伊家執政の時より同腹にて暴政之手傳被致掃部頭殿死去の後も強て悔悟の心無之而已ならず其奸譎計は掃部頭にも超過候様の事件多く有之云云

と。以て當時の感情を見るべし。幕府次いで葡普瑞白以丁の六國と條約を締結し。攘夷論隨て盛んなり。朝廷遂に鎖港を命ず。而して御殿山の外國公使館を燬くものあり米公使の書記官を斫る者あり英公使館を襲ふ者あり英人二名を斫れる者あり。攘夷論に影響せられ幕府各公



使と鎖港を議せども成らず。然れども已に鎖港の勅を奉せり。幕府は二面を有せり。實際は開港にして表面は鎖港なり。鎖港主義に従ひ長藩は米佛蘭三國の船を下關に砲撃せり。三國以て幕府の失となし。償金三百萬弗を要求す。幕府四年に分賦し五十萬弗づ、拂ふを約す。是れ我が國外債の始めなり。

### 第十一節 三主義の解決

勤王主義攘夷主義鎖國主義は社會の中心たる武士の心意を支配し、氣激し、意昂りて安んずると能はず。京師に集まり。或は公卿に説き、或は謀を通じ、或は白晝人を殺す者あり。京師騒然たり。薩摩長門土佐三藩禁闕を守衛すと稱し兵を納る。東西大藩陸續入京す。而して家茂入朝し鎖港の議を決す。幕府困りて横濱を鎖さんとし、各國公使と議したれども又諧はず。已むを得ず。朝廷亦已むを得ずして之を許せり。鎖港を斷行すると能はざりしは權力主義の衰へたるに由ると雖も一方には

外國の事情往昔に異なる者あり。其の勢の鋭なる徳川氏當初の權力を以てすと雖も或は拒絶すべからざりしならむ。故に幕府の開港を許すも彼我の國勢を測る時は已むを得ざるなり。朝廷の三港互市を許せるも亦已むを得ざる所なり。此に至り鎖港主義攘夷主義海防主義は解決せられたり。解決せられざる者は勤王主義のみ。

### 第十二節 勤王主義の解決

朝廷が政治の中心たる能はざるは權力なきがためのみ。權力とは他にあらず。人間の結合せられたる力なり。多くの力を得る者は權力を有し、失ふ者は亡ぶ。幕府は大なる權力を有し、小なる權力者大名を服従し居りしと雖も、諸種の主義の勃興してより幕府を離れて朝廷に向ふもの益々多く。將軍家茂の時薩摩長門土佐三藩禁闕守衛に託して兵を納れたるは已に朝廷權力の基礎をなす者なり。况んや朝廷は權威の府なるに於てをや。其威望は隆々として日に昇れり。慶應二年幕府長門藩



を征し師に名なく、關西諸藩を率ひて一長藩に敗られたり。而して幕府の威望全く竭く。茲に於いて土佐の山内豊信其の臣後藤象次郎福岡孝弟等を使として時の將軍慶喜に上書し幕府を廢して朝廷に仕へ、政令をして一途に出でしめ、以て外難に當るべきを言はしむ。薩摩藩臣小松清廉、大久保利通等亦安藝備前の諸藩士と謀り、慶喜に勸む。慶喜亦時勢の已む可からざるを察し、上書して將軍職を辭す。其の文に曰はく。

臣慶喜謹んで皇國時運の沿革を考候に昔王綱紐を解き相家權を執り保平の亂政權武門に移てより祖宗に至り更に寵眷を蒙り、二百餘年子孫相受け臣其の職を奉ずと雖も政研當を失ふ事不少今日の形勢に至り候も畢竟薄徳の致す所不堪慙懼候況むや當今外國の交際日に盛なるより愈々朝權一途に出來不申候ては綱紀難立候間從來の舊習を改め、政權を朝廷に歸し奉り天下の公議を盡し聖斷を仰ぎ、同心協力、共に皇國を保護仕候得ば、必海外萬國と可併立候臣慶喜國家に所盡不過之と奉存候乍去猶見込之儀も有之候へば可申聞旨請

候へ相達置候依之此段奏聞仕候と

將軍の意此の如し。天皇之を許し玉ふ。時に慶應三年十月十五日なり。二十四日慶喜又征夷大將軍を辭す。此に於いて幕府の本幹朴る。而して王政復古となる。次て十二月十日王政復古の大詔出づ。

徳川内府從前御委任大政返上將軍職辭退の兩條、今般斷然被聞食候抑、癸巳以來未曾有之困難、先帝頻年被惱宸襟候御次第衆庶之所知に候、依之被決徹慮、王政復古國威挽回之御基被爲立候間、自今攝關幕府等廢絶、即今先假に總裁議定參與之三職を置かれ、萬機可被爲行、諸事神武創業の始に原き縉紳武辨堂上地下の別なく至當の公議を竭し天下と休戚を同く可被遊徹慮に付勉勵舊來驕惰の汚習を洗ひ盡忠報國の誠を以て可致奉公候事、

此時に當り、朝廷權力の基礎をなすは薩摩藩安藝藩長門藩土佐藩尾戸藩越前藩等を主となす。其餘半信半疑の者あり。又徳川氏に左祖するあり。會津桑名莊内は其の最もなる者なり。其の實に於いても其の名



に於いても王政復古なりと雖も社會的結合力は未だ全く消失せざるなり。茲に於いて感情の争は兩派の間に避く可からざるなり。(一)慶喜會桑の兵を率ひて大阪に行き事に由りて薩摩を討んとし京師に行かしむ。薩長等の兵邀へて伏見鳥羽に撃ち之れを走らしむ。朝廷即ち嘉彰親王を征討大將軍となし京を發す。慶喜逃れ歸へる。詔して慶喜以下會桑藩主の官位を褫き大に幕府に與みする藩を討し鎮撫總督を諸道に派遣す。諸藩相次いで服す。東征總督熾仁親王諸道並らび來り慶喜の死を許るして水戸に幽し江戸城を收む。(二)幕臣榎本武揚艦船八艘を以て遁る。大島圭介、福田道直等數千人、兩總に走る。(三)仙臺米澤等會津に應じ官軍に抗す。此時大總督府江戸に在り東北を進剿す。(四)幕府の臣輪王寺宮を擁して上野東叡山に據り彰義隊と稱す。官軍の破る所となり親王會津に走る。會津を中心として仙臺米澤越後の諸藩連合して官軍に抗す。而して諸藩次いで降る。幕府の臣榎本武揚幕府の軍艦を奪ひ函館に航して五稜廓に據る。大島圭介又來り會す。官軍急に攻めて遂に

武揚等を降す。感情の衝突此に至りて全く消滅し天下朝廷を戴かざるなきなり。

### 第十一章 人文主義

此くして從來永く社會の問題たりし勤王論も亦全く解釋せられたり。我が國にては朝廷絶對主義ならでは到底治まる可からざるとが全く證明せられたり。是に於いて千餘年來漸く養ひ來れる土地絶對主義社會統一主義等は全く人心より撲滅せられ只管朝廷の威命を承順するに至れり。此の朝廷絶對主義は徳川時代文教の盛んなる結果として生じ來れる者にして徳川氏なかりせば此く發達せる精神は生ぜざりしなるべし。徳川時代の文教主義は種々の方面より維新の朝廷絶對主義を産出したる者と謂ふべきなり。

然るに朝廷絶對主義を積極的に取る者は比較的少數の人のみ。即ち



維新の際に勳功ありたる諸大名及び慷慨の人のみ。其の餘の者は依然として其の藩主あるを知るのみにして天皇あるを知らざるなり。今や徳川氏の封建制度は廢れて朝廷の封建制度たるを知らざるなり。是に於いて明治四年藩を廢して縣となす。土佐藩身を以て先んじ諸藩之れに倣ふ。藩主を以て知事となす。是に於いて全國皆朝廷を知るに至れり。朝廷絶對主義は愈々益々人心中に實現せられたり。朝廷は權威の中心點なり。故に人民最も敬意を表せざる者鮮し。是に於いて徳川氏の如き權力を以て人民を壓制する主義の必要あるとなし。

一方に於いて文教主義の唱導者維新文明の先導者は徳川時代の中流階級なりき。中流階級の勢力は社會を左右するに足る大原動力なりしなり。文教主義が權力主義を打破するに足る大原動力なりしなり。是に於いて極端なる階級主義世襲主義は斷然打破せられざるを得ず。況して西洋の進歩せる武器發達せる軍隊に對抗するには兵力を武門の専業と限る可からず。必ずや力を平民に藉らざる可からず。是の理當時

に在りて炳焉たり。是に於いて明治元年の大詔を煥發せり。曰はく

一 廣く會議を起し萬機公論に決すべし。

一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一 官民一途庶民に至る迄各其の志を遂げ人心をして倦まざらしめ

むとを要す。

一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

一 智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

之れを五條の御誓文と曰ふ。其の聖旨は一般人民をして政權に參與せしめんとするに在り。聖勅は社會を指導する一步進める者なれども亦た當時社會の向ふ所を知るに足る。

此くして狹隘なる權力主義の打破せらるゝと共に

一 武士道は不必要とならざるを得ず。

二 武士平民の別は廢せられ平等とならざるを得ず。

平民は固より職業に従事せしが士族は何等の藝能もなく如何ともす



ると能はず。零落して社會の最下級に落るもの少からず。生活問題は頓に起り。經濟の觀念は一般に上れり。之と共に職業に貴賤の別を設けざるに至れり。而して社會は只管人文的發達をなし。人間の欲望のあらん限りを満足するの分業は起り來らざるを得ざるなり。之れを人文主義の時代となす。

人文主義は個人は一切素能 *talents* を開發せんとする者なり。個人を重んずるの觀念は起れり。即ち明治十一二年の頃板垣退助自由民権論を唱ふ。一方に於て福澤諭吉經濟主義を鼓吹せり。交通機關は鐵道電信を始めとし、汽車汽船の便は日に月に増加せられ、實業機關は微に細に分業し、徳川氏の農を以て國の本とせると大に其趣を異にせり。

人文主義は社會の圓滿なる發達なり。交通機關の完備し、教育の普及し、天皇の觀念浸潤し、全社會一の有機體なるの觀念は一般に勃興せり。社會は外界の事情より影響せられ變形せられざるを得ず。世界各國は各々國家主義を以て相ひ衝突しつゝあり。是を以て兵備は常に備へら

れざる可からず。必要に應じて何時にても發し得ざるべからず。然るに今や孤島懸隔の地勢を利用する能はず。亞細亞の東端に於て西洋各國と利害關係を生ずるの勢昭々たるに至れり。明治二十七年清國天津條約を破りたるに由り、之れを討ち、遼東及臺灣を得たり。然るに露佛獨三國遼東を我に附するを以て東洋の平和に害ありとなし、支那に還附せしむ。戰勝の結果國民の意識は膨脹し、眞箇に世界の日本を以て自任するに至れり。往古天神高天原を統御し、大八洲を經營し、列聖相ひ承け、一たび朝鮮を征し、一たび蒙古の侵入を防ぎ、東洋の獨立なる一大帝國を以て外國との交通を開らき、遂に支那の一部をも我が範圍となすに至れり。歴史を考ふるに我が日本の範圍は小よりして漸く大に向ひつゝありしなり。

此の日本社會の精神、及び其の結合して以て精神を成す所以の要素を考ふるに、天皇の觀念、宗教、公徳、動機等は最も主なるものなり。

一、天皇の觀念。維新の改革は天皇の觀念が最も強く人心を司配せる



に由りしなり。天皇の觀念は法令の發布せらると共に人心に喚び起され、小學教育にては讀本より教育敕語より、兒童の精神に印象せらる。天災地變の際の御給恤金、御巡幸、其の他社會的の條件より天皇の觀念は尤も強く印象せらるゝの機會を有す。然れども、單に天皇と云ふ觀念にあらずして、天皇は天照太神の正統にして、我が國當然の司配者なり、政治の中心たりとの觀念是れなり。是を以て今や社會の人心は日常如何なる場合にも天皇の觀念を離るゝこと能はず。天皇を名譽の淵源となし。天皇のためには水火をも辭せざらむとするなり。天皇の觀念は實に社會を統一する最も強き紐帶なり。

二、宗教。(イ)祖先の靈魂が自己を保護し居るとの觀念祖先の靈魂が存  
在し居るとの觀念は殆んど人心の中より跡を絶ちしが如し。朝廷は神主  
政治を以て主義としたるが故に此の觀念依然として衰へず、大事ある  
毎に必ず之れを祖先の靈に告げ給へり。

憲法發布の御告文に云はく、

皇朕れ謹み畏み、皇宗の神靈に語り白さく

又其下文に曰はく

皇祖皇宗及皇考の神祐を禱り、併て朕が現在及將來に臣民を率先し  
此の憲章を履行して愆らざらむことを誓ふ。

と。以て見るべきなり。而して祖神を敬するの篤き、神宮は依然とし  
て古の建築法に據り、質朴を極めたり。天照太神を日本社會の建設者と  
して日本人種の祖神として尊信する此の觀念は教育の進歩と共に益々人  
民の中に普及せらる。正月元日天照太神の大串を戸々に奉置するの習  
慣は都會に於けるも亦衰退の徴を見ず。天照太神の奉尊は又實に日本  
社會を結合する強固なる紐帶なり。ギッヂングス曰はく日本社會は猶ほ  
祖先崇拜の位置に在りと。(principles of sociology) 我が國は人文的發達を  
なすも祖先崇拜の觀念は未來永劫に亘りて消滅することなかるべきな  
り。

二、佛教は日本に其種類多し。東西兩本願寺最も多くの信徒を有し、且







き感あらしむ。而して此の人民は年々約四十萬三十一年統計に據るの速度を以て増加しつつあるなり。

## 結論

高天原の氏族は大八洲に移り、諸氏族及土蜘蛛族を服従せしめたり。崇神の時叛者猶ほ多く、神功皇后三韓を征し始めて外國文明に接するの端を開き、歸化せる者亦多し。是に於いて氏族制は破れて大化の改革となり。外國文明の輸入せらるゝと共に京師は腐敗し、地方には土地私有の陋習を生じ、遂に盜賊の蜂起を促がし、武力主義の勃興を見るに至れり。武力主義は頼朝に由りて貫徹せられ、天下は源氏の統御する所となり。以後北條氏足利氏互ひに代はりて覇權を掌握し、大に亂れ、豪傑の士争て天下を一統せんとし、信長秀吉を経て家康に至り。天下は其の權力に服従し、文教興り、勤王主義起り、遂に維新の社會を現出するに至れり。

抑も日本社會の發達を助けし源因は何んぞやと云ふに。

- (一)人口自然の増加。
- (二)外國人の添加。
- (三)自然世界及社會的外界
- (四)外社會。

是れなり。人口の自然に増加するは生存競争を烈しくし、分業を増し、社會を進歩せしむるに大なる力ある者なり。外國人の添加は社會を複雑にし、個人の精神をして複雑ならしむる所以の大源因なり。我が日本に於いて人口の増加は驚くべき者あり。而して外國人の添加するも平安朝以前に於いては非常なる者なりき。

日本の自然世界は又日本の今日の社會をして此くあらしめたる一大源因なり。之れを分析すれば、(一)溫和なる氣候、(二)豊饒なる五穀、(三)地勢の海中に突出多きこと、(四)地震の多きこと、(五)海に由りて圍まれ居ると等なり。此れ等の外界が日本人をして、溫和、伶俐、冒險等の氣質を養成せしめたり。



然れども如何なる外界が如何なる氣質を作りしか其の詳かなるとは諸社會より歸納的に述べるにあらざれば人をして信ぜしむるに足らず。故に吾人は茲に之れを論ぜず。唯だ此れ等の外界は日本社會をして文明に向ふの餘裕あらしめたることを記憶せざる可からず。一方より之れを観れば支那の社會は數多の群が結合して成れる者なり。朝鮮も亦た然かり。日本は之れと異なり。天神の血裔と信じ同一血統而かも優尙なる血統の觀念に由りて統一せられ、此の觀念が社會に於て最も勢力を占めたるが故に日本人をして忠義を尙ぶ所の純潔の氣風を作れるとは疑ふ可からざるなり。

次ぎに日本社會發達の好條件たりし者は外社會の薄弱なりしとなり。外社會とは何んぞや。朝鮮蝦夷是れなり。是れ等の社會にして強盛なりしならむには兵力の上にて其の壓倒する所となり。國用給せず。文明に向ふの餘裕あざりしならむ。幸ひにして外社會が薄弱なりしため、之れを征して其の利を得。優勝人種の意識を作り、優勝の餘裕を以て

遂に文明に向ひたるなり。

海を隔て、支那の大社會あるに拘はらず。日本社會が此く優勝人種の意識を作りたるは全く孤島懸隔し、支那と何等の關係もなかりしを以てなり。一たび此の意識を作りし後始めて支那との關係を生ぜるなるを以て之れを恐れつゝも能く對等の禮をなし。其の文明を利用しつゝありき。然れども支那は我を見ると屬國の如く、足利義滿を封じて日本國王となし、秀吉をも封じて同く日本國王となさんとす。我を以て度外に措くや知るべきなり。此くの如く尊大に構へ、實際に國力も大なる故始めより支那と交通せしならむには兵力上に勢力を消耗し、此くの如き文明を致すと能はざりしならむ。支那の文明は絶へず輸入せられしが最も影響の大なりしは前後二回にして唐と明と是れなり。唐と交通しては其の制度と文物とを輸入し、明と交通しては其の工藝美術を輸入せり。徳川氏に及むて朝鮮と交通し、其の使節來るや、盛んに之れを禮遇せしに彼れ卻て傲慢無禮の意を生じ、巡視、清道、令等の旗を建てたり。此



れ白石の論ぜし如く、武事にては叶はぬ故に我が文盲に乗じ、文事にて我を凌がんとせるなり。草茅危言二然りと雖も今日吾が社會に存在せる書籍の製造、紙筆、墨、日本畫、書布の模様の或る者等は皆支那又は三韓より來れるなり。儒教を講じ、佛書を讀むは家々皆な是れなれども其の源は支那朝鮮より傳はれるなり。由是觀之。支那朝鮮の吾が文明を増殖したる實に大なりと謂ふべきなり。吾が國今日の開化は實に支那朝鮮に負ふ所大多數なりと謂ふべきなり。

然れども彼の國の文物は我が國に入りて同化せられたり。佛教が祈禱宗となれるは其の一例なり。徳川氏の初世仁齋徂徠損軒の徒が宋儒を攻撃したるも哲學的なる學説を破りて現在のとなしたるなり。刀劍は我が國に持有にして銳利なると傳ひ稀れなり。紙も朝鮮より來りしが紙質は強靱にして唐紙と異なれり。ギユスタープ、ル、ボン氏は各民族には固有の品性ありて、一切の現象は其の發現なりとなせり。其の品性たるや、數多の性質より成るなり (Psychologie du peuple) 我が國にも亦我が

國固有の品性ありて此の品性のために外國の文明は同化せらるゝなり。西洋諸國との交通は足利氏の末頃よりとす。小銃望遠鏡菓子の製法等を輸入し、我が文明の上に影響を及ぼせりと雖も支那の大なるに及ばず。徳川氏の末頃より政治的に大なる影響を及ぼし、維新以後は其の文物制度續々として入り來り、吾が社會を擧げて所謂西洋的文明の範圍に入れり。

要之。日本社會は外國文明の影響を受けつゝ、諸現象が繼起勃興し、以て今日の社會組織と文明とを致せるなり。日本社會は實に外國の文明を利用しつゝあるものなり。先きには支那朝鮮に取り、今や専ら西洋に取りつゝあるなり。故を以てか、西人の日本を見ると頗る輕し。二三年前日本に來りし佛人ヘルツル氏の日本紀行に曰はく。

Mais les Japonais, qui ne s'empoisonnent pas, qui manient les plus belles armes à feu de la civilisation, qui lisent nos livres et nos journaux, forment leurs rivages et tracent tout seuls leurs voies ferrées, ne sont et ne peuvent



れ白石の論ぜし如く、武事にては叶はぬ故に我が文盲に乗じ、文事にて我を凌がんとせるなり。草茅危言然りと雖も今日吾が社會に存在せる書籍の製造紙、筆墨、日本畫、書布の模様の或る者等は皆支那又は三韓より來れるなり。儒教を講じ、佛書を讀むは家々皆な是れなれども其の源は支那朝鮮より傳はれるなり。由是觀之。支那朝鮮の吾が文明を増殖したる實に大なりと謂ふべきなり。吾が國今日の開化は實に支那朝鮮に負ふ所大多數なりと謂ふべきなり。

然れども彼の國の文物は我が國に入りて同化せられたり。佛教が新禰宗となれるは其の一例なり。徳川氏の初世仁齋徠徠損軒の徒が宋儒を攻撃したるも哲學的なる學説を破りて現在的となしたるなり。刀劍は我が國に持有にして銳利なると憐ひ稀れなり。紙も朝鮮より來りしが紙質は強靱にして唐紙と異なれり。ギユスタール、ボン氏は各民族には固有の品性ありて、一切の現象は其の發現なりとなせり。其の品性たるや、數多の性質より成るなり (Psychologie du peuple) 我が國にも亦我が

國固有の品性ありて此の品性のために外國の文明は同化せらるゝなり。西洋諸國との交通は足利氏の末頃よりとす。小銃望遠鏡菓子の製法等を輸入し、我が文明の上に影響を及ぼせりと雖も支那の大なるに及ばず。徳川氏の末頃より政治的に大なる影響を及ぼし、維新以後は其の文物制度續々として入り來り、吾が社會を擧げて所謂西洋的文明の範圍に入れり。

要之。日本社會は外國文明の影響を受けつゝ、諸現象が繼起勃興し、以て今日の社會組織と文明とを致せるなり。日本社會は實に外國の文明を利用しつゝあるものなり。先きには支那朝鮮に取り、今や専ら西洋に取りつゝあるなり。故を以てか、西人の日本を見ると頗る輕し。二三年前日本に來りし佛人ヘルツル氏の日本紀行に曰はく。

Mais les Japonais, qui ne s'empoisonnent pas, qui manient les plus belles armes à feu de la civilisation, qui lisent nos livres et nos journaux, forifient leurs rivages et tracent tout seuls leurs voies ferrées, ne sont et ne peuvent



être que des singes (La société Japonaise 5.)

と。此れ日本人を猿と見做したるなり。又日本人が哲學に於いては東西兩洋を調和する位置に立てりと云ふを評して曰はく、

le pédantisme glace souvent leur verre naturelle. Fanfarons de science, ils mêlent à leurs rodomontades d'incroyables naïvetés. Vous lirez dans une revue philosophique des phrases comme celle-ci: "Nous finissons l'Occident et commençons l'Orient: il convient que le Japon donne au monde un grand génie synthétique." (ibid. 387.)

と。乃ち以て學究的の說となすなり。殊に彼のギュスターブ、ルボン氏の如きは人種の優劣を表し、日本人を以て黒色人種より優るも猶ほ下等なる人種なりとなせり。ルツォルノ氏は社會學(La sociologie)を著はし、其の中に日本の社會を論じ、封建制にして八個の階級より成る者となせり。然かも此の書は一千八百九十二年に刊行せられたる者なり。而してギッディングス氏も亦日本を以て猶ほ祖先崇拜の位置にある者となす。

後の三氏の如きは嘗て日本を知らざるものなり。日本を實地見聞したる所のミルツォル氏は日本人を以て猿の類とはなしながら一方に於いては進歩の偉大なるを驚き居れり。曰はく、

De petits êtres ..... ont adapté nos canons nos chemins de fer, nos télégraphes, nos codes, nos institutions, parlementaires. Ils s'évertuent à nous prouver que la supériorité dont nous nous flattions n'est point inhérente à notre nature (ibid. 2).

と。西洋文明を吸収せんとする所の此の傾向は後來永く止むとなく、縦ひ對等の文明國となるも猶ほ止むとなく。新現象は果して何れの處にか起るべき。

今や日本の社會は只管新智識を喜び新事業を歓迎す。前者未だ功を奏せずして後者背に接す。十年は已に昔したり。其の説は陳腐たるなり。變幻出沒端睨すべからずとは蓋し此れを謂ふなるべし。嗚呼志あるの士其れ百千年を通覽し以て邦家のためを謀らざるべけらや。





本日社會の發達の及思想遷終

明治三十六年十二月廿七日印刷  
明治三十七年一月十六日發行

定價金六拾錢

著者 遠藤隆吉

發行兼者 森山章之丞

東京市神田區表神保町二番地

不許複製

印刷所 株式會社 英舍

發兌元 東京神田表神保町 同文館

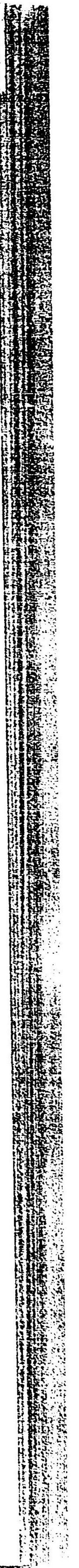
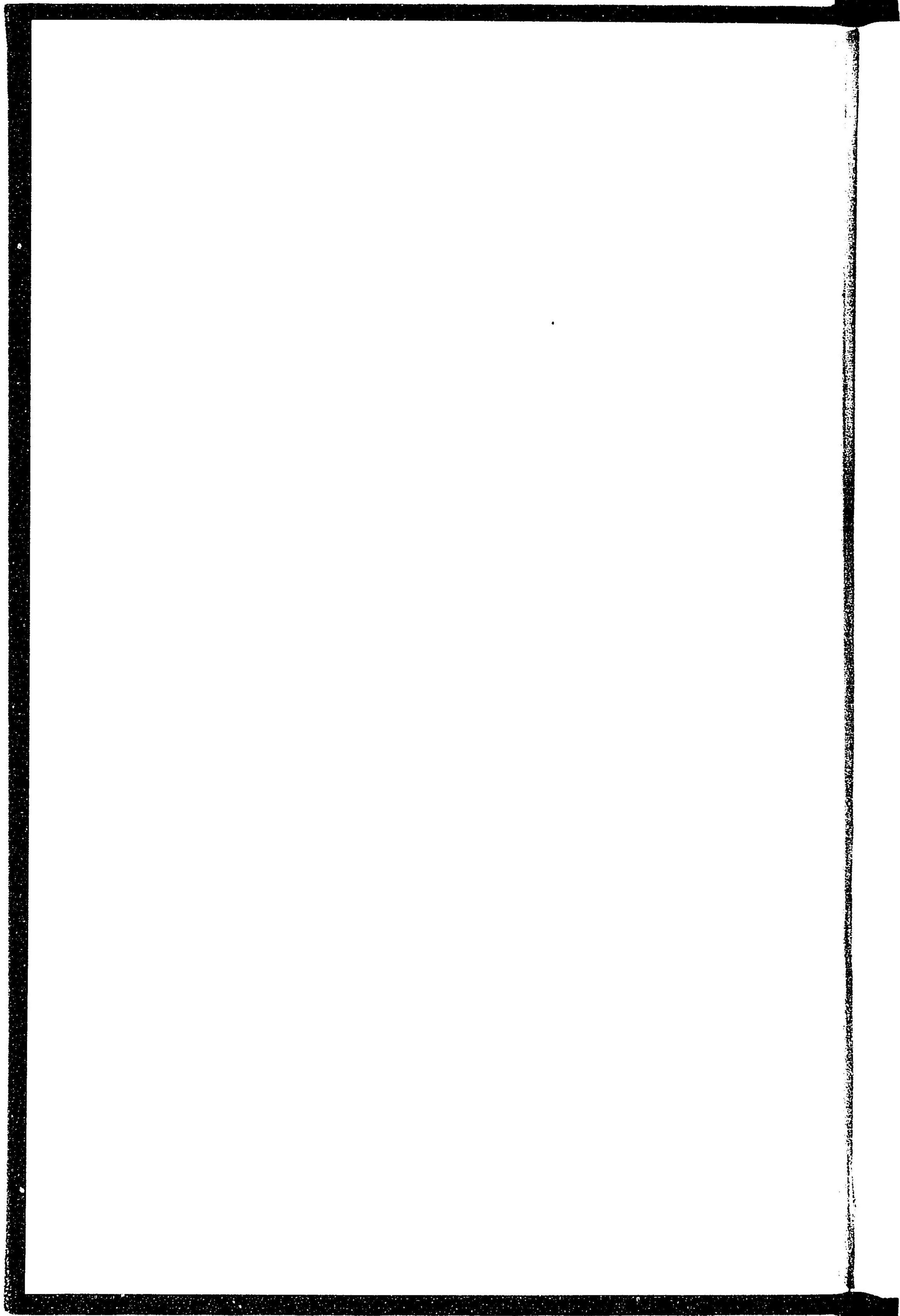
關西大 賣捌所 備後町 寶文館 東北大 賣捌所 仙臺 大町五 弘道館



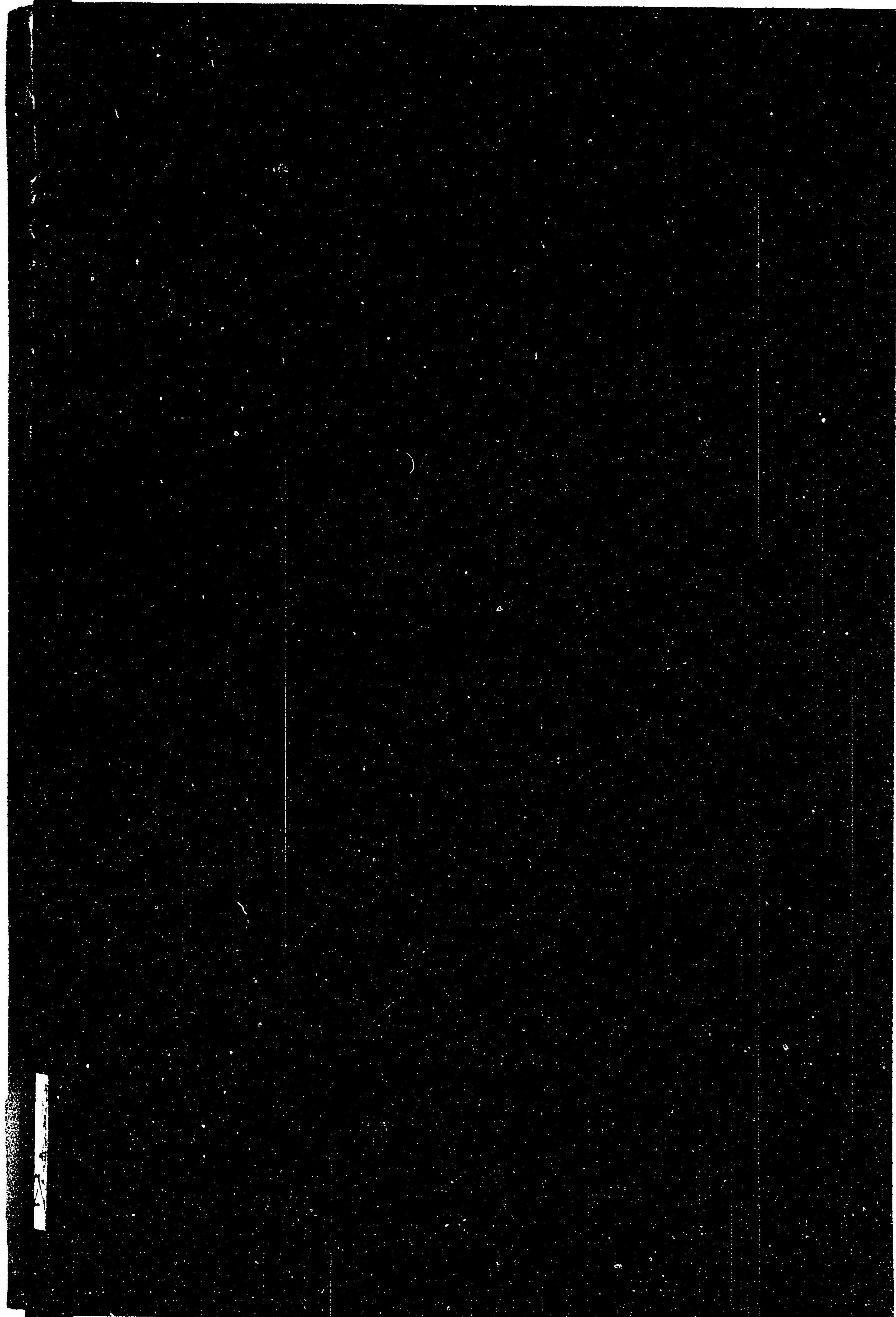
18k39

72











45  
402

(M)

039676-000-1

45-402

日本社会の発達及思想の変遷

遠藤 隆吉 / 著

M37.1

BDA-0256

